

次郎長

次郎長翁を知る会
会報 第18号
平成17年6月12日発行
発行所
〒424-0821
静岡市清水区相生町6-17
静岡市観光協会清水支部内
TEL (0543) 54-2420
発行人 竹内 宏
人字
編集人 田口 英爾
印刷所 (株)ニシガイ
TEL (0543) 52-2188

平成十七年度總會開催へ——生誕二〇〇年へ向けて

今年四月から政令指定都市静岡が出發。次郎長生誕の地は清水区として名を留める。生誕二百年まであと十五年という節目の年、記念講演には、次郎長伝「背負い富士」執筆中の山本一力さんが駆けつけ、元気を出してと清水に声援して下さい。

總會には地元興津出身の宝井馬琴師匠も駆けつけてくれることになっている。昨年は国立歴史民俗博物館での「民衆文化のつくられたヒーローたち」の展示や、加藤剛主演の「次郎長が行く」東京三越劇場での公演など、実り多い年であった。

「オール読物」誌 平成十七年新年号から始まった山本一力さんの連載「背負い富士」の扉絵



今年もまた、正月の幕あけから、人気作家山本一力さんが「オール読物」で連載次郎長伝・背負い富士の執筆を始め、四月には劇団扉座による「次郎長伝異聞・語り継ぐ者たち」が紀伊国屋サザンシアターで公演され、話題を呼んだ。

山本一力さんは、連載に先立ち取材のため、昨年十一月二十日清水港を訪ねた。入念な準備で始められた「背負い富士」は実に山本一力さんならではの新しい次郎長の世界を創り出している。

次郎長には富士山が似合う。明治三十六年、読売新聞の「千人評」には乃木大将や福沢諭吉と並んで、次郎長をこう評している。

「さあ来いと、富士を背中に背負って立つ、男の中の男一匹」

次郎長没後十年のこの評は、没後百十年余を経た今日でも、変わることはない。(山本一力さんの記念講演は總會終了後、午後一時から開かれます)

山本一力さんのプロフィール

高知県出身。三年ほど前、「あかね空」で第二十六回直木賞を受賞。「梅咲きぬ」「だいこん」「銭売り賽蔵」など次々とヒット作を出し、「オール読物」誌では、次郎長伝・背負い富士を連載中。



写真提供
エスバルス通り魚伴

山本一力さんの作品を読んで

私は、山本一力さんの作品は、「あかね空」「損料屋喜八郎始末控」はいうまでもなく、下町人情豊かな「いっぽん桜」「萩ゆれて」「そこにすいかずら」「芒種のあさがお」は特に好きで、一気に読ませて頂き、読書の楽しみが倍增しました。

評にいわれるように「立っているだけで江戸庶民の気持になれる所だ」と思います。

そして「ワシントンハイツの旋風」は、直木賞作家の原点があると思いました。

「夕日があかね空に染めた。水平線の空、高知の桂浜とおんなじや、桂浜とアラモアナの浜とは、数千キロのへだたりがあるが、海はどちらも太平洋だ」

主人公謙吾がハワイの夕日を眺めながら、あか

ね空に、心から感動した気持が伝わってきます。

もう一人広い海と巨大な異国船を見て、感動した男があります。

清水次郎長は、文政九年（一八二六）七歳の時、清水港に入港した中国寧波の巨大な貿易船「特泰号」を見て、世界の広いことを知り、いつか、海の向こうの世界へ行つて見たいという夢をもった

天田愚庵 「順禮日記」の足跡を訪ねて

明治二十六年次郎長没年の秋彼岸に出発

明治二十六年、次郎長が七十四年の生涯を閉じた年、愚庵天田五郎は西国三十三箇所巡礼の旅に立ちました。

愚庵研究家柳内守一氏によれば、愚庵は次郎長の訃報を旅先の北海道で知り、六月、京都への帰路清水港へ立寄つて梅蔭寺の墓前に香華を手向けたといひます。

平成十七年五月、私たち次郎長翁を知る会会員や地元歴史愛好家たちからなる一行は、百年余も前愚庵が次郎長菩提のため巡礼として歩いた足跡を訪ねることとしました。といつても二泊三日の旅。愚庵が杖を片手に三か月かけて歩いた旅にはくらべるべきありません。わずかに速玉神社など新宮の二社、一番札所の青岸渡寺、那智滝、二番札所の紀三井寺など南紀の一部に過ぎません。しかし田辺市やその近郊の朝来では、愚庵が道に迷つた末に訪ねた圓鏡寺や、愚庵の故郷いわき市ゆかりの安藤氏菩提寺海蔵寺なども訪ね、田辺出

と言われています。

山本一力さんは「深川駕籠」「辰巳八景」など、次々とヒット作を飛ばしています。全国の山本一力ファンと共に、今後一層の縦横無尽の御活躍を期待したいと思います。

（室伏尚美・運営委員）

身の巨人南方熊楠邸跡では「安藤みかん」に行き会うなど、小さくない収穫も得ました。

愚庵が明治二十六年、北海道からの帰途立ち寄つた当時の梅蔭寺住職は萬休和尚です。この人は紀州田辺近郊朝来の圓鏡寺出身。次郎長は萬休和尚のことを「紀州から来た御用木」と呼んでいました。

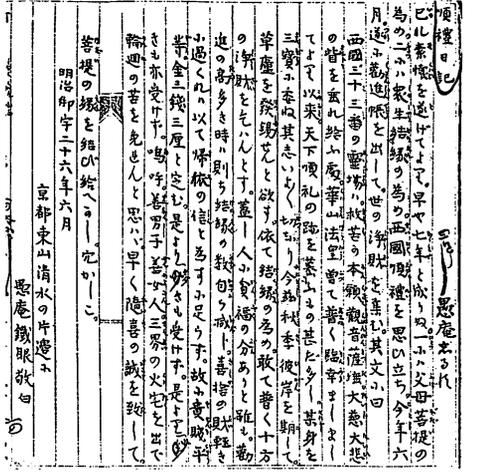
この話を伝えているのは、萬休和尚の弟子月心和尚です。月心和尚は編集子の祖父に当りますが、昭和八年当時の静岡放送局（NHK）から次郎長についてのラジオ放送した時の草稿にこのことが書いてあります。

きつと融通のきかない頑固で真面目な人柄だったので、「紀州の御用木」と呼ばれたのでしょう。出家した愚庵と萬休和尚が初めて出会うのは、愚庵が北海道からの帰途梅蔭寺に立ち寄る明治二十六年六月のことなのです。

もう二十年も前、萬休和尚の来歴を調べるため編集子は南紀を歩き、その一日、田辺の市立図書館で当時館長をされていた杉中浩一郎さんにお会いしました。『順禮日記』の圓鏡寺のくだりに「熊山」とあるのは、「熊嶽」の誤りであろうとのこととを初めて知つたのは、その時のことでした。

二十年ぶりの南紀の旅の三日め、私たちはジャンボ・タクシーを雇つて朝来の圓鏡寺から田辺へ向かいました。田辺の最初の見学予定地は、南方熊楠邸です。二十年ぶりにお会いする杉中さんは、もう八十歳を超えておられるはずだが、背筋をぴんと伸ばし、すたすたと私たちよりも早く歩いて、熊楠邸から海蔵寺、鬮鶏神社へと先導されました。

熊楠邸の庭内に一本の青々と葉を茂らせた蜜柑の若木が植えられています。説明板には「安藤みかん」とあります。ここを見学する主目的はこの



天田愚庵「順禮日記」草稿・立命館図書館蔵

安藤みかんにありました。杉中さんは私たちのために、安藤みかんについて記されている南方熊楠の書簡を資料として用意されていました。

安藤みかんは、紀州藩安藤家の邸内にあつたところから名づけられたといわれます。「紀州から来た御用木」と呼ばれた萬休和尚が住職をしていた明治・大正時代に梅蔭寺境内にも移植され、編集子の子どもの時分には、毎年秋、夏みかんほどの大きさの実を、青いうちに収穫していました。青いうちが最も美味なのです。明治二十年代の熊楠の書簡によれば、この安藤みかんが、静岡県庵原郡蒲原町志田学而の経営する蜜柑園で栽培されたと記されています。

ところで、安藤みかんに注目した南方熊楠は、いうまでもなく昭和天皇にも侍講した偉大な植物学者でもあります。あの夏目漱石や正岡子規と同級生でもあります。明治十七年入学の東京帝国大学予備門の成績表(『南方熊楠アルバム』)には、



南方熊楠邸の安藤みかん

塩原金之助(漱石)や正岡常規(子規)の名とともに熊楠の名が並んでいます。さらにもう一人ここには忘れてはならない人物の名があります。それは「中川小十郎」という人物です。彼は最後の元老西園寺公望の秘書官であり、立命館大学創立者として知られるばかりでなく、熱烈な愚庵信奉者であり、住居も隣合わせ、晩年の愚庵と毎日朝食を共にしたといわれます。

熊楠邸から杉中さんの案内で海蔵寺、鬮鶏神社と歩いた私たち一行は、田辺駅からJRに乗り、三十三箇所第二札所の紀三井寺に向かいました。

南紀熊野古道の旅

天野 香

五月のさわやかな日、『順禮日記』をたどりながら世界遺産を訪ねた。

新宮駅に降りると、駅前にわが国最初の口語体による童謡「はとぼっば」の歌碑が目に入る。愚庵が訪ねた徐福の墓の代わりに、徐福公園の入口には中国風のきらびやかな楼門が建ち、不老長寿の霊薬を求めて渡来した徐福を偲ばせる。

私たちは世界遺産の熊野速玉大社に向う。鮮やかな朱塗りの大鳥居をくぐると、心静まる空間が広がっている。左に平重盛の手植えと伝えられる巨大なナギの樹がある。かつて平治の乱の後に、平重盛は大勝利を感謝して速玉神社に自ら神木を植えたという。神門をくぐると壮麗な朱塗りの社殿が立ち並んでいる。神宮の説明によると、以前は神倉山にまつられていた神々を今の場所に移し「新宮」の名がおこったといわれる。私はすずめ

られて神倉神社に行くことにした。

愚庵も速玉神社に次いで神倉神社に詣でている。『順禮日記』十月十七日には、「石の階段四五町登れば、山の頂きに差し出でたる大巖あり」と記されている。私は石段を見て驚いた。五三八

段の石段は、かつて見たことがないほど曲りくねった急な石段で、一つひとつが高いため杖も役立たず、私たちは四つん這いで登った。山の頂きにはゴトビキ岩を御神体とする祠堂がある。

心地よい風にあたり、しみいるような青い空、黒潮洗う白浜の海岸と新緑の山やまなど、新宮の街の眺めはずばらしい。夜は新宮のさる居酒屋で名物のめはりずし、鯨のさしみなどを堪能した。

翌朝は早立ちで二〇〇四年七月に世界遺産に登録された熊野古道を通り那智を訪ねる。古代から中世にかけて神のこもる国と信じられた熊野の地は、上皇、貴族から庶民に至るまで多くの人々が参詣している。

勝浦町大門坂は昔の姿のまま残り、樹齢八百年の夫婦杉、蒼然と並ぶ杉木立にいしえのロマンを感じる。夫婦杉の手前の大門坂茶屋では、熊野詣の盛んだった頃の平安衣装を貸してくれる。私は早速、衣装に身を包み往時を偲びつつ散策を楽しんだ。ここにも源頼朝寄進とされる石段が続き、那智大社に着く。熊野三山の一つで那智の大滝を信仰する自然崇拜に始まり、四世紀に現在地に社殿を移した。熊野造り、権現造りの朱塗りも鮮やかである。台湾人らしい若者たちのツアーで境内はにぎわっている。西国第一番札所として名高い青岸渡寺のお堂は秀吉公の建立と順禮日記にある。



那智の滝

那智の滝を右側にみる朱塗りの三重塔に目を見はる。一番札所の御主印を頂き、急坂を下って大滝を見る。

十月十九日の『順禮日記』にこう記してある。「滝は数百丈の岩の上より、大浪の崩れかかるが如く、綿を投げ散らす如く、山もどよみて落ちたぎる」



追悼 府川松太郎さん

昨年(平成十六年)十月二日、府川松太郎さんがお亡くなりになった。享年九十一歳である。

府川さんは平成四年本会創立に際して、趣意書の起草から関わり、設立總會においては議長をつとめた、いわば元老である。

愚庵が訪ねた時は秋も深まる季節だったが、今は新緑。雨もたっぷり降った故か、滝の水量も豊かで「山もどよみて落ちたぎる」そのままである。愚庵は徒歩で熊野古道を通り、道に迷いながら十月二十五日に朝来の円鏡寺を訪ね、二十六日から二十七日にかけて田辺の海蔵寺、藤巖神社を訪ねている。私たち一行は白浜に泊り、翌朝ジャンボタクシーで朝来から田辺市内を廻った。

円鏡寺は明治、大正時代に梅蔭寺の住職をつとめた萬休和尚の出身地である。私たちは円鏡寺住職からお茶の接待を受け、色紙を頂いた。本堂前には巨大な高田川化石が安置されている。山門の所に立つと遠く熊野古道が見渡せる。

田辺市では、元田辺市立図書館長の杉中浩一郎

共に中心的存在として創立以来活躍された服部令一さんが平成十四年に逝去され、続いて府川さんが鬼籍に入り、本会の重鎮を相次いで失ったことは痛恨のきわみと言わなければならぬ。

府川さんは大正三年田清水市追分三十七番地に生まれ、老舗追分羊かんの経営に従事するかたわら、「松太郎童話上・下」「追分今昔記」「梶原平三景時」「駿河讃歌」など郷土の史話をまとめた著作を数多く残している。

また座談、小話の名手で、次郎長翁を知る会のバス旅行などの時、軽妙な語り口で周囲を笑わせていたことを、編集子はいま忘れることができない。(合掌)

さんにより南方熊楠邸をご案内して頂いた。邸内には安藤みかんの樹が植えられており、杉中さんから熊楠と安藤みかんの関わりを記した資料など頂いた。梅蔭寺には、萬休和尚が田辺から移植した安藤みかんの大樹があり、青い果実がたわわに実っていたそうである。

杉中さんは紀州藩付家老安藤氏ゆかりの海蔵寺や鬮鶏神社(境内に藤巖神社あり)も御案内して下さいました。

帰途は和歌山で途中下車し、第二番札所の紀三井寺に参詣した。二百段を超える石段である。

この春、私は桜に誘われて『順禮日記』の第二十番札所の善峯寺と第三十三番札所華嚴寺を参詣した。こうして西国三十三箇所のうち、四箇所を廻ったことになる。

残された札所を、ゆっくり楽しみながら廻ってみたいと私は思っている。(運営委員)

編集室から

● 總會会場の興津公民館は昨年完成したばかり。柿落^{はなは}としては馬琴師匠が出演。師匠の生家は、この公民館真正面にあたる国道沿いにある。あの正岡子規が明治三十五年、転地療養を決意した病室は、師匠生家の筋向かい、今の河村医院の場所である。子規の句碑は清見寺の前にある。

● 劇団扇座公演「清水次郎長伝・異聞」語り継ぐ者たち」を見る。神田伯山、広沢虎造、天田愚庵を演ずる若手俳優の強烈な演技が印象的。

● 「次郎長翁を知る会」ホームページのアドレスは次の通りです。 <http://jirocho.com>